

重罪犯にて刑務所にある 某眞宗徒に送れる手紙

綱 脇 龍 妙

御手紙を嬉しく拜見しました。御健康で益々懺悔生活の勤務を勵まれてゐるのが何よりです。人間は考へて見るご一生懺悔です。これが別らずに自分だけは正直者善人の積りでゐるから間違が起るのです。人をも恨むのです。お釋迦様といふ様な、非常な崇高な人格者、大きな正直な人を標準にして吾人を側量して御覽なさい、大分立派な積りの自分が、如何にみすぼらしく、穢く、小さく、哀れな、穴があらば這入りもしたい程の、眞に深障深重、愚痴暗鈍の凡夫だといふことが別ります。この意味で沈香も焚かず屁もこかずして、而も自分免許の善人であるよりも、過つて大罪を犯して、然もそれが動機となつて翻然悔悟して懺悔生活に入り、眞實の救濟をうけ得た者の方が、どれだけ幸福であるか別らぬものだと思はれます。

貴君！、貴君は主人殺し斬取り強盜等の大罪惡を犯し、後良心の呵責に耐へず、翻然僧となつて淨き懺悔生活に入り、最後に二十一年の長年月を凄慘なる苦難と闘い、遂に耶馬溪中の三百八間の大隧道を開鑿した前名市九郎僧了海の事をお聞きになつてゐるでしよう。あれです。あれです。私共の行くべき路は實際あの外には無いのです。只自發的にするのと、強制的にさせらるゝのとの異いはあつても、結局同じ所に進まねばならぬと思ひます。

私は佛門に入つて、自己が罪障深重の凡夫だといふことが、段々深く別らせらるゝ様になりました。過去生々を考へるこゝ、何をして來てゐるやら別らぬと思ひます。私は深敬病院を經營しかけて、今年二十四年になりますが、初めは氣の毒な人達を救ふといふ念が強かつたが、段々に自己の凡夫といふこゝが悲しくなつて、これは懺悔滅罪の隧道開鑿だといふ心が強くなつて參りました。それから他から誹謗されようが、中傷されようが、當然だと思ふ様になり、否寧ろ喜ばねばならぬと思ひ得る様になりました。それで私は此の命のあらん限りは、日本に癩病が盡きるまでは、此隧道を堀りつけて行かねばならぬと思ふ様になりました。私はこゝに根本懺悔の大方針を建てゝゐます。

御蔭に、私は此頃、自己の心の奥底に、少しく眞の光明がさして來た様な氣持が致します。私は毎曉約一時間程、佛祖三寶の御前で、眞劍に、大聲に、一々文々に、法華經の半卷宛を讀誦し、日蓮聖人

の遺文一頁計りを拜讀し、それから南無妙法蓮華經の御題目を數百遍、これも心ご力とを罩めて唱へます。それから又昨年から高臺に安置してある久遠本佛殿といふに參り、立像釋迦牟尼如來の御前に、至心三禮の後、法華經方便品、如來壽量品偈、常不輕菩薩品偈を、殆ど聲涙共に下るといふ様に感激を以て讀誦し、唱題數十遍、祈願文、四弘誓願等を高唱して殿堂を出でます。此時宛も東方富士山と此の身延山との間にある天子ヶ獄といふ高い山から、爛爛として騰る朝暾に向つて、靜かに如來神力品偈を讀誦し、唱題十遍計り、燦爛たる太陽の光明を佛陀の眉間の盡十方に輝く光明と假定して、眞すぐに額にびつたりと當て、冥目合掌して、自己内性の佛性の發揮を祈り、更に如日月光明、能除諸幽冥、斯人行世間、能滅衆生闇、不染世間法、如蓮華在水ご一心に唱へます。これは私が永年變らずに續けて來た行事であります、それから境内の掃除を手傳ひ、朝の食膳につき、一同と共に合掌して、本佛無縁の大慈悲は、罪障深重の我等にも、御國の居住を許したまふ。

『民の骨を碎ける米、人の血を絞れる酒』鮮光淨水皆悉く、本因菩薩道の御功德に非ざるは無し。願くば如來恒に我が上に在しまして、哀愍加被を垂れたまへ。常念痴慢を離れ、貪慾瞋恚を去り、深敬の行に住し、國土莊嚴の務を勵まん事を。

と、至心に唱へ、且つ祈願しまして、感謝の内に食事を終り、それから事務に移ります。雑多な、終

日忙しい用務の間に、新聞雜誌位を読みますが、雑誌も忙しい爲に、到底氣のきいな物は讀めず、況して書物は哀しいかな滅多に讀む事が出来ません、夕飯後又本佛殿に參り、四境靜寂の間に本佛釋迦牟尼如來に面奉し、深達罪福相、遍照於十方、微妙淨法身、具相三十二と讚文を心の中に唱へ、靜に唱題を修し、或は禪定三昧に入り、心鏡を淨拭し、皆懺悔を修し、如來禪寂の妙境地を、ごくおぼろげなれども、少分味はして戴く様な、何とも謂い様のない、感激感謝に満ちた好い氣持の三十分乃至一時間を濟まし、それから其日の殘務を爲し終りて佛陀に感謝して寢に就きます。

以上が私の日課であります。事務が大層停滯したり、旅行する時等は、無論此れが障げられます。が、有難い事は、最近私は、御蔭で私は何となく心が日光の照り映ゆるが如く、蓮華の美しく咲きいでゝゐる如く、歡喜の心自づと身に充滿してゐます。随つて總てに對し感謝感激の心を禁ずることが出来ません。これまで、家庭の者、同居の種々の人々に對しても、兎角不懣の心が起り、それが何となく煩悶となる事もありましたが、近來何事にも不懣を感せず、歡喜怡悅の心に満ちてゐます、随つて滅多に小言を謂いません、それで家人も皆氣嫌好くしてくれ、それぐの任務の仕事も着々と、命せずして運んでくれます。家庭が先づ我此土安穩、天人常充滿となつて來ました。在院患者が、又實に勤勉に働いてくれています、種々の野菜が實に豊富に出來てゐます。紅白紫黄様々の草花が、院内の

限々に、實に麗しく咲き満ちてゐます。柿栗梨桃くるみ無花果等の果物迄が、彼所此所と熟する様になりました。禮拜堂(天鼓殿)には晝夜と無く、太鼓に和して御題目の聲が絶えません。幾棟の病室からは笑ひの聲が、何時もさざめいてゐます。眞に園林諸樓閣、種々寶莊嚴、寶樹多華果、衆生所遊樂、諸天擊天鼓、常作衆伎樂とは、一般世間からは兎角不快の感を以て觀らるゝ、この私の深敬病院の事だと心の奥底から涙ぐましい程嬉しく感ずる様になりました。

如來神力品偈の『日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人、世間に行じて、能く衆生の闇を滅し』の意味が、漸くの事に別りかけて參りました。自己の心の佛性が、神殿のほがらかなる鏡の如く、大空の太陽の如く、秋夜の満月の如く、煩惱雜念の雲霧、執著の塵垢、我慾の糞穢を、綺麗すつかりと捨て去る時、そうして、其輝きの心にて人々に接する時、對者は又其人の心の太陽、月、鏡に照されて、自づと、其人の様に、心の闇黒を去り、清淨光明の歡喜心に住することが實際だと、確信する様になりました。

『諸の惡は作す莫れ、衆の善は奉行すべし、自ら其意を淨くす、是れ佛陀の教へ』といふ七佛通戒偈の有難い徹底した教の意味が、大分別つて參りました。

日蓮聖人が、四條金吾女房御返事に書かれてある『明なる事日月に過ぎんや、淨き事蓮華に勝るべ

しや、法華經は日月と蓮華となり、日蓮又日月と蓮華との如くなり(故に日蓮と名く)の金文の意味も同様理解し得らるゝ様になりました。

無學無智なる私は、斯くして根本佛教の意味も、實大乘法華經の意味も、日蓮聖人の唱題成佛の意味も、全く根底に於て同一であると理解し得て、眞に安心し喜びに堪へません。

貴君、貴君は刑務所にゐる事を、刑務所といふ文字や詞に固執してはいけません。自己が情け無い地獄にでも落ちてゐる様に、又他が無理やりに墮しこんだ様に執念せられてはいけません。刑務所こそは眞に貴君が救はるゝ寂光淨土ですよ。佛陀の光明其物ですよ。救済に要する唯一の綱ですよ。貴君の目覺めが、信念が、此處まで來ねば駄目ですよ刑務所があつたらばこそと、歡喜感謝の涙を絞るまで來ねばなりませんよ。

貴君、貴君は先づ數秒時間乃至一分間でよろしい、佛陀の光明の前に照されて淨潔の心になつて御覽なさい。何に佛陀なんて存在が別らぬて、愚らぬ屁理屈に拘泥したものですなあ、面倒だから、それでは東山から出づる太陽でよろしい、何科學が許さぬ、其科學なる物が哀れなものさ、足許の草一本だとして科學で眞の説明が盡さるゝと思ふてゐますか。小さな頭で佛陀の博大なる悟境を疑うものではありません。先づ佛陀の智慧は太陽の光明の如く、其慈悲も太陽の熱の如きものであります。太陽に

對つては誰しも明るさと暖かさとは直感しましょう。なぜ太陽が實在するから、なぜ光る、なぜ暖い、そんなことは今の問題ではありません。兎に角下らぬ理屈、凡慮をすて、清淨光明の心を起して御覽なさい、次に其心を一分間から二分間、三分間と持續してご覽なさい、毎日此を練習して精々此の時間の延長を計つてご覽なさい。此の間一切を打忘れて、太陽の如く、明月の如く、明鏡の如く、蓮華の如く、清淨光明の心の中に没入して行くのですよ。其所に貴君は何時となく、新しき眞の自己を發見するでしょう。そうして貴君は根本から救はれます。自己の心の中に何時の間にか佛陀が御貌を浮べたまうを發見するようになります。

貴君、貴君は無理に、一日も早く此場所を逃れよう、一日も早く放釋されようなどと思ふ様では駄目です。それでは矢張り救はるゝ日は容易に來ません。總てを佛陀に任せたまつり、前述の光明の心、歡喜感謝の心のみを續け、一切を只命ぜらるゝまゝになさい。私は、貴君が、已に斯に來つて、私の至心に祈り、且つ勸むる意味を御了解ある事と信ずる。

貴君は、私が先年贈りました佛教聖典中の、鶯窟摩（指鬘外道）の事を熟讀なされたでしょう。釋尊が前月九十九人も人を殺した彼に、『我生れて已來、曾て人を殺さず』と唱へよと仰せられました時に、鶯窟摩は愕然として驚いて涙を垂れ、『私は大虐人であります』と泣き乍ら申すと、何ぞ釋尊は

仰せられましたか、實に釋尊の仰せは、『生れてとは、懺悔に依つて、眞實の汝が生れたのだ、それを謂ふのだ』とあるではありませんか、私共は鴛窟摩と共に、釋尊の御前にひれ伏さねばなりません。それでも未だ眞實の懺悔が出来ませぬか。私は刀を持つては、未だ人を殺しはしませぬが、随分と言辭や心を持つて、他を傷け害して來ています。現世の身三、口四、意三の罪業だけでも、嚴密に計算しましたならば、確に鴛窟摩以上と謂はねばならぬかも知れません。鴛窟摩は、實に、氣の毒な動機から、澤山の人を殺しましたが、眞に同情すべき罪惡と謂はねばなりません。私のなどは佛敎修行者とか、ヤア敎化者だとか申し乍ら、邪心、穢心、名譽心、慾心、嫉妬心等から、長劫に罪を作つてゐますから、鴛窟摩以上に懺悔せねば救はれぬと思ひます。

貴君！、貴君の造つた罪は、鴛窟摩の罪の何分の一、何十分の一であつたらうが、根本懺悔をせねばならぬ事は同一です。願くば大釋尊の御前に、至心懺悔して、光明界裡に新しく、美しく、生きよと一日片時も早く生れて下さい。非常な忙しさですから、これで筆を止めます。折角寒暖を注意して御自愛下さい。遙に私は、此の身延の靈地から、貴君が、如來照顯の下に蘇生せらるゝのを眺め、且つ祈願してゐます。

南無釋迦牟尼佛　南無釋迦牟尼佛　南無妙法蓮華經　南無妙法蓮華經